夜道を進む馬車

吉村　ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜道を進む馬車

【Ｎコード】
Ｎ８３３２Ａ

【作者名】
吉村　ハル

【あらすじ】
追ってから少女が逃げ続ける物語

馬車は夜の道を進む。
カタカタと、馬車の車輪が街道にきしむ音。
その心地よい音を聞き流しながら、馬車の中のケニーは、親のいない孤独と必死に闘っていた。
馬車の中は、座席も何もない狭い空間。ケニーは、うつむいて座っている。
夜空には星々がキラキラと瞬いて綺麗で明るいというのに、台車にはホロが屋根代わりに張られていて、暗い車内。
ケニーの横から、明かりが射している。月の明かりだ。ケニーの横は、馬車の出入口になっており、上からカーテンが下げられていた。
月明かりが薄いカーテン越しに、ケニーの身体を照らす。
細い腕。小さな手。そして……ネズミ色の指輪。ケニーは右手の中指に指輪をはめていた。
指輪は錆びてネズミ色になっていたのだが、どこか、若い頃は戦地を駆け抜けた勇猛果敢な老戦死のような気高さが感じられる。
とつぜん、車内にやかましい音が響く。驚き、思わずケニーは顔を上げてしまう。
乗客のいびきであった。奥に乗客が一人横たわっている。体には毛布。気持ちのよさそうな顔。寝つきはいいらしい。
ケニーは顔を歪めた。顔を上げると、惨めな現実が身にしみ、孤独感が増した。
乗客は大きな荷物袋を枕にして眠っているが、ケニーは荷物を何も持っていない。毛布も何もない。つまり、手ぶらだった。
カーテンが夜風に揺れる。車内に流れてきた夜風は、とても冷たい。

ケニーは少しでも暖まろうと両腕をさすった。激しく激しく。
しかし、ちっとも、暖まってはくれなかった。ケニーは心の隅々まで冷え切っていた。
孤独という疲れと、先のわからない不安で。
「……もう、いや」
目尻にためていた涙を、口をつぐみ、流れ落ちるのをかろうじて堪える。
ケニーは祈るように、両手を握り合わせる。意識は指輪に集中していた。
目をつむり、誰にも聞こえないような小さな声で、決意を確かめる。
「この指輪は、命にかえて守り通ります。絶対に」
ケニーの生家は、伝統ある名家だった。
歴代の当主は数々の難関と苦境をその強靭な精神力で乗り超え、家の名を世に轟かせたのだ。
その当主としての証の指輪は、祖から子へと代々受け継がれてきた大切な物だった。
先祖代々の誇りだった。
そうであるがゆえに、何としても、何としても、ケニーは指輪を守り通す覚悟だった。
ケニーの心を汲み取ったように意思とも関係なく、自然と神経が右足に集中する。爪先を残してかかとが、上がる。下がる。上がる。下がる。それは徐々に速度を上げていった。
ケニーの激しい貧乏揺すり。
いつのまにか、ケニーの瞳は恐怖に揺らいでいた。
シャッターを切ったカメラ写真の映像1コマ1コマのように、断片的に昨夜の出来事が思い出される。
――たくさんのコウモリ。
――数は百を超える、コウモリの真紅の眼。
――水死体のような血の気のない男の顔。

――その男の冷笑。
――そして、その男のくぐもった声。
「……指輪」
いつのまにか、拳に握られた手はギトギトと汗ばんでいた。
昨夜、父親と一緒に馬車に乗って、あるパーティから帰る途中だったケニーは、途中、襲われたのだ。たくさんのコウモリに。誰かに操られているかように、集団で襲ってきた。
ケニーは父親の言う通りに、馬車を降り逃げようとしたが、待ち伏せていた誰かに腕を掴まれてしまった。振り返った先に見たその男の顔こそ、例の男。つまり、水死体のような血の気のない顔の男。
その手を払いのけ、追いかけてきた男を振り切ろうと森を抜けて街に逃げたが、足の遅かったケニーでは、繁華街に身を隠すのが、やっとだった。――すぐに見つかる。その胸騒ぎがどうしてしずまらなかったケニーは、遠くに逃れようと、夜行馬車に乗ったのだった。
「来る……あの人は、必ず来る……」
ケニーの膝の揺れはしずまらなかった。目的のためになら、どんな汚い事にさえ手を染めかねないような男のにごった眼が頭に浮かぶ。
直感ではあったが、ケニーは例の男が指輪を奪いに来る気が、してならない。
ガタッ。
その音に、ケニーは顔が強張るのを感じた。カーテンの外にある馬車を降りる踏み段から、その音は聞こえた。
「誰かが……馬車に……乗ってきた？」
一瞬、例の男が頭を横切る。ケニーは恐る恐る目を向ける。カーテンの方に。
「まさか、もう追いついて……」
続く言葉が出なかった。両手で口を押え、目が恐怖でカッと開く。目尻から涙がこぼれおちた。

カーテンには人のシルエットが浮かび上がっていた。ボンヤリとした黒いシルエット。
そこに、人が立っているのあきらかだった。
――例の男？
ネズミ色の指輪を見る。何としても、これだけは、守り抜かねばならない。
しかし、ケニーはある事実を悟った。
――逃げられない。
あまりの恐怖に、腰を抜かしていたのだ。黒いシルエットはカーテンにたたずんだまま、動かない。
が、動き出すのは、時間の問題のように思えた。
ケニーの目は、恐怖におしやられた。嫌な事を想像してしまったのだ。
もし――男が鋭利な刃物を取り出したら……。
もし――それを胸に突き刺されたら……。
言いようのない悪寒が、ケニーを襲った。それは、どんなに、痛いのだろうか。
次の瞬間、生まれてから9年間しか使っていないケニーの幼い脳は、今までの人生で一番痛かった事を思い出していた。
扉の角と壁に、指をはさまれた痛みを思い出していた。指の皮が剥けた。3重にも。縫い針を数十本、指に射されては抜かれ、射されては抜かれたような激しい痛みだった。
「あの時より……痛いのかな……？」
ケニーの頬を、一粒の涙が流れ落ちた。
その時、シルエットがゆらりと動いた。
ケニーはきつく目をつむり、覚悟を決めた。しかし、それは傷みに対してではなかった。
――指輪は絶対に渡さない――

しかし、いつまでたっても痛みはこなかった。
そして、しばらくが経った。
だから、ケニーはおずおずと目を開けた。
黒いシルエットは、上半身を残したまま、動かなかった。もし、カーテンがまくられたのなら、踏み段に腰掛けた、少年が見えたことだろう。
カーテンが揺れ、夜風が車内に流れる。その人の匂いをふくんで。
ケニーは鼻をスンスンと動かした。鼻の奥を刺すような夜風の冷たい匂いとともに、その少年の匂いは感じられた。お日様の匂いのような暖かい匂いに、ケニーには感じられた。
その途端、ケニーは恐怖から解放され、心の底から安堵したように大きく息を吐く。
黒いシルエットは、例の男ではなかったことをケニーは悟ったのだ。
男の匂いは、薬とカビが程よく混ざったような、すっぱくてきつくて嫌な匂いがするのだ。
ケニーの嗅覚は、犬の嗅覚以上に様々な細かい匂いをかぎわけられる。ケニーの生まれつき備わった不思議な力だ。
「じゃあ……カーテンの外の人は、一体だれなの？」
ケニーは理解した。
おそらく、馬車のただ乗りだろう。
揺れる車内を、ケニーは膝を使って進むと、できるかぎりカーテンに近づいた。
ケニーとただ乗りの少年の距離は、カーテンを一枚へだてるのみ。
車内に流れる夜風が、ケニーにその人の匂いを運ぶ。
花の香りを鼻に受けているように、ケニーの顔がやわらぐ。
「落ち着くな……何だか、父様といるよう……」
ケニーは体を丸めて、目を閉じた。
その人の匂いは、今のケニーにとって、最良の薬だった。孤独という疲れと、先にたいする不安という病に対向してくれる薬だ。

今、ケニーは先の見えない未来なんて、どうでもよかった。
ただ、その人の近くにいたかった。
ただ、その人の匂いを感じていたかった。
その人に、話し掛ける勇気はケニーにはないけど、ケニーはそれでよかった。
ケニーはこんな状況でも、今を幸せだと思える自分を、好きだと思えた。
馬車はただ、夜の道を進む。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8332a/

夜道を進む馬車

2011年1月30日02時39分発行